マランツ創業 60 周年

−音楽に捧げた 60 年− because music matters

すべては音楽のために：because music matters

今年マランツは創業 60 周年を迎えました。マランツは創業 60 周年を記念し、ネットワークプレーヤー『NA-11S1』を発売いたします。NA-11S1 は、ハイレゾリューション音源の高品位な音楽を最大限に引き出すことができる新世代のネットワークプレーヤーです。ネットワークからダウンロードしたハイレゾリューション音源を、スタジオマスターの品質そのままにご家庭でお楽しみいただけます。この例を引くまでもなく、マランツは創業以来 60 年の歴史を通じて常にオーディオシーンにブレイクスルーをもたらす革新的な製品を世に送り出し続け、高い評価を維持してきました。

ではなぜ、マランツは 60 年もの長きにわたり、可能性の限界を打ち破り続けることができたのでしょうか。「その答えは、私たちのブランドスローガンの中にあります」──アジアパシフィック地域プレジデントの T.H.キムはそうご説明しています。ウェブサイトやカタログ、そして広告で、マランツは常に“because music matter”（すべては音楽のために）と謳っています。これは単なる販売戦略のためのスローガンではありません。創業した時から私たちを駆り立てているフィロソフィー（哲学）であり、同時にマランツと他のオーディオメーカーとの違いを鮮明にしているものなのです。

人々の声によって始まった

一部には良く知られている逸話ですが、マランツの創業者であるソウル・B・マランツは、当初会社の設立などは考えていませんでした。彼は単に当時の市販されているオーディオ機器では満できず、より高音質に自分の持っているレコードライブラリーを再生したいと思ったのです。そのため 4 年間をかけて機構と回路の設計を行い、当時の各々のレコードに最適なイコライザーカーブを調整できる改造を自分のプリアンプに施しました。当初は自分の趣味で行った改造でしたが、このプリアンプで再生される音を聴いた人々からの「どうしてもほしい」という声に応え「オーディオコンソレット」と名付けて 1952 年に 100 台を製造しました。さらにその 1 年以内に 400 台を追加生産したにもかかわらず、完成前にすべてが完売してしまいました。この成

功を受けて 1953 年にはマランツカンパニーが誕生し、オーディオコンソレットは量産製品として「Model1」と名前を改め、世に送り出されました。

ソウル・B・マランツは生粋の音楽愛好家でした。彼は熱心な音楽リスナーであっただけでなく、才能豊かなアマチュアミュージシャンでもありました。これはマランツと他のオーディオメーカーとの大きな違いであり、これが後にマランツの優位性をもたらすこととなります。彼は音楽の演奏で最も重要なことは「演奏家どうしが互いに調和することである」ということを知っていました。たとえ卓越した技量を持つ演奏家でも、共演者と完全に調和しなければ、いい音楽を生み出すことは不可能です。ソウル・B・マランツはこの原則をよく理解していました。そしてオーディオシステムの構成パーツの選定や組み立てにおいても、同じ考え方を持って臨みました。これはマランツが他のオーディオメーカーとの違いを際立たせている点です。マランツにとって重要なのは「音楽そのもの」であり、技術開発における「性能」ではありません。

何も変わらないということ

この 60 年の間、オーディオ業界には何度も大きな変革がありました。しかしマランツのフィロソフィーは決して揺るぐことはありませんでした。T.H.キムはこう言っています。「日本の設計者であっても、あるいはヨーロッパの設計者であっても、マランツの設計者であれば誰もがトランスや D/A コンバーターを選択する際に、部品単体の良し悪しではなく、他の回路や部品との組み合わせた時に、どのような性能を発揮するかを重視します。オーディオ機器の開発は、ある意味でスポーツチームを作り上げることに似ています。膨大な資金を使って世界中から一流のプレーヤーを集めたとしても、そのチームが必ず勝てるチームになるとは限りません。各プレーヤーは自分のプレーに秀でているだけでなく、自分以外のプレーヤーに好影響を与え、お互いを高めあうことができること。そしてそれによってチーム全体が一体となることが重要です。マランツの設計者はオーディオ機器の開発でも同じことがいえることを熟知しています。幸運なことに我々のチーム、特に日本の設計者たちはこの点で豊かな経験を持っており、製品開発のすべての過程にこのフィロソフィーが息づいています」

エレクトロニクスではなく、スポーツコーチングのように

マランツではもちろん製品開発時に電気機器や測定器を使用しています。しかし測定器は音に関する静的なデータしか測定することができません。それはたとえばスチールカメラがダン

サーの動きを瞬間的にしか捉えられないことと似ています。写真は瞬間を正確に記録できますが、ダンサーのスピード感やダイナミズム、リズム感を捉えることはできません。音楽もまた非常にダイナミックです。音楽表現において、音色、音量、音の強弱は常に変化します。そのため、製品を評価する際には私たちが音楽的に熟知している音源を使用します。この方法でしか、個々のパーツや構成要素がどう連携し、全体に対してどう貢献しているかを知ることはできません。

真空管からトランジスタを経て IC へと移行した急激な技術革新の中で、あるいはレコードからCD、そしてダウンロード音源へと音源そのものが大きく変化してきた中で、マランツが単に生き残っただけでなく、トップブランドとして存在し続けることができた理由は、この方法にあるのかもしれません。音楽がパッケージされたものであっても、ダウンロード音源のようにパッケージされていないものであろうと、マランツは常に新しいフォーマットに対して卓越した音楽再生を求めて新しいチームをつくります。決して既存のチームに新しいボールを適用させようとはしません。

創業当初のマランツには「音楽再生の限界を押し進め限界点を見直す」というミッションのもと、向上を求める情熱と音楽への献身的な姿勢が満ちていました。そして 60 年を経た今も、マランツの開発者たちは創業者の精神を継承し、常に技術的な限界をさらに推し進めています。マランツにとって技術を進化させることは、いわばゴールのない旅です。飛躍的な技術の進化や、それまでの常識を変えるようなブレイクスルーは、音楽再生のクオリティを進歩させ、アーティストの意図をより正確に伝えることを可能にします。マランツで働く者は、この旅を続けていることに誇りを持っています。マランツでは、そのすべてが音楽再生のために捧げられているのです。”because music matters”

ヒストリーマイルストーン

マランツの歴史の中で最も重要なマイルストーンの一つは、伝説的な 3 つの名器:『Model 7』:真空管式ステレオプリアンプ、『Model 8』:真空管式ステレオパワーアンプ、『Model 9』:真空管式モノーラルパワーアンプが発売された時期です。これらの機器はそれまでの製品とは比べ物にならない飛躍的な音質改善によって HiFi のクオリティを再認識し、Model 7 はその後 11 年もの間に 130,000 台もの販売を記録しました。1963 年に入って間もなく『Model 10B』:真空管式 FM 専用チューナーが発売されました。パワーとバランスを確認できるオシロスコープが前面パネルに搭載されたこのモデルもまた HiFi のクオリティを再認識させることになりました。

1970 年代には非常にパワフルなアンプとレシーバーによって新たな段階に入ります。『Model 500』は 2x250W/8ohm という当時では突出した出力スペックを誇りました。このメガアンプでは熱対策のために特殊な熱分散テクノロジーを使った革新的なクーリングトンネルが採用されました。

その後 Esotec シリーズが展開されます。ステレオパワーアンプの『SM1000』は 42kg もあり 2x400W/8ohm という出力スペックでした。またこのシリーズにはオーディオファイルの羨望となるダイレクトドライブターンテーブル『TT1000』があります。このモデルにはアルミ板を高密度ガラスでサンドウィッチした 3 層構造ソリッドベースが採用されました。

80 年代初期には『Model 2600』が発売され好評を博します。このモデルは 32kg のステレオレシーバーで 2x300W/8ohm の出力スペックでした。

CD フォーマットが確定された 1983 年から 1 年余りのうちにマランツはフィリップス・ソニーと共に民生用 CD プレーヤーを発売しました。当時デコーダーは 14 ビットの解像度しかありませんでしたが、4 倍オーバーサンプリングを採用したマランツのプレーヤーは 16 ビットの解像度を持ち CD プレーヤーの第一人者としての評価を確固としました。

1985 年には AV の世界で新たなスタンダードをつくりだしました。革新的な『RV-55』は民生機器としてサラウンドプロセッサーを搭載した最初のモデルでした。このモデルは左右のステレオ、センター、サラウンドのオーディオチャンネルを使うことにより映画館の音場を一般家庭のリビングルームで再現可能とするかつてないモデルでした。轟音がとどろくスター・ウォーズ トリロジーや、ゴースト

バスターズの雷鳴、フラッシュダンスの音楽を劇場そのものにリビングルームで楽しめるようになりました。

1991 年には最高水準のシグマ 1 ビット AD コンバーターとビットストリーム DA コンバーター SAA7350 を搭載したデジタルオーディオシグナルプロセッサー『AX1000』(オーディオコンピューター)が発売されました。室内音響特性の補正や著名ホールの残響特性を付加する音場創成、各種信号の測定機能など多機能を装備していました。

現在ではごく一般的に使われている室内音響補正とサラウンド効果ですが、1991 年当時では革新的なことであり、マランツがデジタルオーディオプロセッシング分野で成功を収めた基となりました。このノウハウがその後の AV レシーバーに搭載される MRAC(Marantz Room Acoustic Calibration)またはプレミアムネットワークオーディオプレイヤーや CD プレーヤーに搭載されるマランツミュージカルマスタリングに発展します。またこの技術は最高水準のオーディオ再生を達成するうえで、デジタルオーディオを理解し DAC とデジタルフィルターの仕様と選択が如何に重要であるかという理解を高めることに貢献しました。

1993 年には『CD-63』が発売されました。このモデル名は 1982 年に発売されたオリジナル『CD-63』の名前をそのまま継承されたものです。世界中で 160,000 台も販売されました。

1999 年にはマランツがプレミアムオーディオ再生の分野で培ってきたノウハウをつぎ込んだ初めてのオーディオファイル 5ch AV レシーバー『SR-14』が発売されました。このモデルの登場により AV クオリティの基準は新たな時代を迎えました。このモデルは数多くのアワードを受賞しリファレンス機器して多くの評論家たちの視聴室に導入されました。その特徴は分厚いアルミフロントパネルと重厚な銅板筐体、削り出し銅脚によって外観が構成され、強力なトロイダルトランスフォーマーによって 5x140W/8ohm のパワーを出力しました。

CD プレーヤーの分野でも第一人者として名を馳せるマランツは常にその最前線を歩んできました。1999 年にスーパーオーディオ CD(SA-CD)がアナウンスされた時にはそのリファレンスプレーヤー『SA-1』を発売しました。また 2006 年には新たなリファレンスプレーヤーとして『SA-7S1』を発売し、そのシステムを構成するアンプとしてプリアンプ『SC-7S2』とパワーアンプ『MA-9S2』を同時発売しました。

60 周年を迎えたこの年、マランツはセンセーショナルな新たな時代を踏み出します。ちょうど創業時に多くの LP レコードのハイファイ再生を実現したプリアンプのように、また CD 再生のクオリティを再認識させた CD-63 のように、マランツの音楽再生における秀逸な感性は、ネットワークオーディオプレーヤー『NA-11S1』のような製品によってこれからのメディアに対しても与えられていきます。60 周年を迎えた今後のスタートとしてさらなる期待が高まります。

マランツ 60 周年記念スペシャルサイト

http://www.marantz.jp/history

プレスリリースに関するお問い合わせ

株式会社ディーアンドエムホールディングス
国内営業本部　Tel 044-670-6612

because music matters